

地を継ぐ者

詩編 37:1-22

賈 晶淳

今日、私たちは大きな時代の変わり目に立っているように考えられます。グローバリゼーションという言葉が横行し、言葉を裏付けているように世界の情報や資本が半端でないほど早く動いている、確かにこれまでとは違う新しい時代を迎えているような気がします。しかし、このことは言われているほど甘いものでもなく、簡単なことでもありませんでした。もうすでにこのことが原因でテロや戦争、貧富格差や経済危機などいろんな方面から弊害が続出しています。そして、時代に慣れなく、淘汰され苦しむ人も多くいます。しかし、人々は諦めず、この時代に相応しい新しい人物を選び、困難を乗り越えようとしております。

このような時に私自身、この1月18日から始まる1週間を幸せな思いで過ごすことができました。本当に生きて良かったという感じでした。関連報道を見ながら何度も目頭が熱くなったりしました。まるで人類が救われる可能性でも発見したような感じでした。全ての欧米の歴史のなかで初めてのことで、あれほど差別されて来た人種のなかから、差別という壁を乗り越え、世界をリードするリーダーとして、黒人であるバラク・オバマ氏が選ばれ、第44代目のアメリカの大統領として就任したというのは、歴史を塗り替えたような大変重要な出来事であり、このような歴史的な現実に立ち会ったことは本当に感慨無量と思います。

今後彼がどのような政治をして行くのかは全世界の人々にとって大きな関心事であると思います。ブッシュ氏がアメリカの大統領の席についていたこの8年間、私たちはどれほど悪夢を見てきたのかを思いますと、この間の願いや夢の一部が叶えられたことと思います。しかし、私自身は彼が就任したという事実より、彼を選んだ人々に感動し、大きな敬意を表したいです。いくらオバマ氏が政治的にすぐれた者であるとしても、選ばれなかったら何ことにもなりません。無論、アメリカの人々が彼を黒人だから選んだわけではありません。黒人であることを認めた上、一人の人間であり、一人の政治家として将来のアメリカを任せられることを認めてのことでしょう。ここが一番感動するところです。人種やあらゆる差別を乗り越え信頼し、認め合うことに夢があると思いますので。しかし、決して少なくない人々はこれまでの通りに彼が黒人であることを問題視し、彼にとってこの点はこれまでの白人の大統領が持たなかった大きなハードルにもなるでしょう。

昨日までのオバマ氏の支持率がアメリカでは80%を超えているのは勿論、日本でも世論調査で90%近いという発表がありました。日本の麻生太郎氏や韓国の李明博氏の20%に満たない支持率と比べますと驚くべき数字です。どうしてこのようなことが起きているのでしょうか。彼に対する世界の人々の期待感が働いたでしょう。

23日のアメリカのABCニュースの映像を見ました。世界中の子どもたちをインタビューした映像でその笑顔は素晴らしかったです。子どもたちが世界の政治をどこまで分かっているかは疑問ですが、「Yes We Can」とオバマ氏の口真似をしているのを見ながらとても嬉しくなりました。「Yes I Can」ではなく「Yes We Can」であったことに大きな意味を感じます。周りに「Yes I Can」というばかりが多く、疲れることが多くありますが、彼の「Yes We Can」という言葉は何よりも支持者への希望のメッセージであり、支持者を捕りつけるのに大きな働きをしたと思います。

ブッシュ政権の八年というのは全世界が恐怖と憎しみ溢れる時代でした。これからは明るく、平和に生きられる時代になることを願っております。これは彼の就任演説の内容にもありましたように、決して彼一人の責任ではなく、共同の責任であることです。人種間の和解だけでなく、現在の経済の困難も乗り越えなければならない、そして彼の父親がイスラム教人であったことをも思いますと宗教間の和解にも大きな進展があってほしいのです。無論、この人類の歴史を変えていく責任は私たちにもあることを前提しての話です。

本日の聖書とこの歴史的な出来事の間にはどんな関係があるのでしょうか。

聖書にはこの 21 世紀の初めに黒人がアメリカの大統領になるとはどこにも書いてありません。時代の変わり目に占い師や似非預言者が新しい人物や時代状況について述べていることをテレビなどで取り上げたりしますが、どうしてか今回のオバマ氏の当選についてはほとんど聞かないのです。彼らにとっても予想外のことだったようです。

聖書はこのような歴史的な出来事をどのように見ているのかを本日の話のテーマにたく詩編の中から選びました。先ず、この詩編の内容を理解するために本文の中から重要と思われる言葉を掘り出して見ました。それは、本日の題ししましたが、「地を継ぐ」、「地を継ぐ者」という言葉です。そして、この言葉の対概念として、本文に何度も出ている「悪事を謀る者」という言葉です。この二つの言葉を同時に記している個所が 9 節です。

悪事を謀る者は断たれ、主に望みをおく人は、地を継ぐ。

これまでのアメリカの政治を踏まえながら考えますと、両者を鮮明に対比できる言葉のように思えます。偏見かもしれませんが、何故か私の眼には前者はブッシュで、後者はオバマのように見えます。悪事を謀った者ブッシュ政権は断たれ、新しい時代の地を継ぐ者としてオバマ政権が出来たと。このように願っているだけの話ですが、今後はさらに人種や宗教、文化や経済など人類全体に及んでこのようなことが起きることを願うしかありません。しかし、これは他人の話だけではありません。グローバル化の中で大きな問題になっているのは投資ファンドのことで、要するに一攫千金を狙い、多くの人々が自分の資金に何倍にも該当する数字だけで架空のお金で世界的なネットを使って、見えぬ相手に投資する。当然ですが、それが利益として得られるものが誰の、そしてどんなものが全く分かりません。実はその裏には多くの労働者や生産者や企業が消耗品のように使い捨てられ、仕事もしないで、生産もしない人の手にその利益が吸い取られるという仕組みです。その辺境に自分も知らずに立っているのを感じる人はそれほど多くないでしょう。

この話と関連しての内容が本文 14 節から 16 節に書いてあります。

主に逆らう者は剣を抜き、弓を引き絞り、貧しい人、乏しい人を倒そうとし、まっすぐに歩む人を屠ろうとするが 15 その剣はかえって自分の胸を貫き、弓は折れるであろう。16 主に従う人が持っている物は僅かでも主に逆らう者、権力ある者の富にまさる。

現在の世界経済の状況は剣が自分の胸を貫いたところではないでしょうか。現実は大変厳しいですが 16 節はとても慰められる内容です。

話を少し変えますが、面白いことは今回オバマ氏が大統領就任式において選んだ聖句があるらしいです。それは歴代誌下の 7 章 14 節だそうです。

もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす。

よく選んだと思います。「悪の道を捨てて立ち帰る」というくだりを見ますと、感動です。彼を選んだアメリカが今後このような道を選ぶならいいなということです。これに合わせて今日の本文を選んだわけではありませんが、この「悪の道を歩く人」とは本文以外にも詩編に多く出ている「悪事を謀る人」と同様に読み取れます。それから勝手な解釈ですが、最後に出てくる三つの言葉、「天から耳を傾ける」とは世界の人々のことを聞き入れることであり、「罪を赦す」とは和解のことを、特に、その次の「大地をいやす」とは本文との関わりで「地を継ぐ」意味が含まれているように考えられる部分です。

それでは「地を継ぐ」とは何を意味し、「地を継ぐ者」とはどんな人を用いるのでしょうか。この言葉は 37 章だけでも本文以外のところを含めると、3 節、9 節、11 節、18 節、22 節、29 節、34 節、7 回出ています。そして、この他にも地を継ぐ者として思わせる言葉が幾つかあります。例えば、3 節の「主に信頼し、善を行える者」、9 節の「主に望みをおく人」、11 節の「貧しい人」、18 節の「無垢な人」等があります。これらの言葉には地を継ぐ者と関連性が高いと思いますがここでは解釈するつもりはありません。

取りあえず、地を継ぐこととは何なののかについて考えてみる価値はあると思います。実はこのことについて説明する部分はまだ見つけておりません。注解書にも説明がなく、聖書の関連箇所も全部探して見ましたがありませんでした。手がかりと想像力に頼るしかありませんが、今回これと関連して面白い現象を発見しました。それは「地を継ぐ」という時にその「地」という言葉に関連する箇所を探しているうちに、聖書全体を通してそれが変化しているという発見です。これは神学的なアプローチではありません。それは先ず、詩篇の中ではここしかない、18節に記されている「嗣業」という言葉です。この嗣業という言葉はキリスト教では非常に慣れている言葉ですが、驚きましたのはその意味を新しい広辞苑第六版で探してみたのですが載っていませんでした。この言葉の大体の意味は皆さんご存じだと思いますが、ここでは説明しませんが、念のために申しますと、このような言葉が出た時には聖書の後ろの「用語解説」をめぐって見ると大体の場合は説明が記されています。

調べて見た限りでこの「嗣業」という言葉は創世記から申命記までのモーセ五書で主に使われています。その変化ということですが、このモーセ五書を除く旧約聖書の他の殆どのところでは「地」という言葉が使われているということです。そして、さらなる変化とは新約聖書でこの言葉が「神の国」へ変わっていくということです。元々「嗣業」と「地を継ぐ」言葉の意味はほぼ同じ意味だと思えます。何故かと申しますと「嗣業」の「嗣」は「継ぐこと、譲ること」を意味しているためです。無論、嗣業には土地だけではありませんが、「地を継ぐ」へと変化する背景には、確認はしていませんがその地を失ったバビロン捕囚との関係があるのではないかと思います。そして、「神の国」へと変わっていきます。ここまでのところから考えられるのは「地」とは単に土地という意味だけには説明しきれない言葉であることでしょう。そうしますとこれはいったいどんな言葉だったのでしょうか。少し想像力を振ってイスラエル民が出エジプトの後、カナンの地で「嗣業」の土地を取得した時のことを考えてみてください。それはそれまで土地を持っていなかった人が一所懸命に働いて土地を購入し、所有することになったという話ではありません。そして、今の自民党のボンボン出身の政治家のような世襲を意味するものではありません。その土地取得が象徴する内容にはこの世を管理する、統治する以上の意味があります。そこには自由という意味が、神の正義や愛という意味が含まれています。そして、先ほどの歴代誌の大地をいやすという言葉のように回復の意味をも含みます。奴隷的に抑圧されてきた人々が、すべてを奪われた人々が共に生きるために与えられることが嗣業を意味します。

キング牧師がワシントンのリンカン記念堂で述べた「I have a dream」「私には夢がある」という演説文のなかで語っている、「いつの日かジョージアの赤土の丘の上で、かつての奴隷の子孫とかつての奴隷主の子孫が、兄弟愛のテーブルに仲良く座ることができるようになる」という夢が。私には夢がある。今、不正義と抑圧の炎熱に焼かれているミシシッピ州でさえ、自由と正義のオアシスに生まれ変わるだろうという夢が。」(『私には夢がある』新教出版社)とはこの嗣業の土地での生き方と思えますが、それは決して願望でもなく、欲望でもなく、まさか白人に哀願することばでもありません。人類の本来の生き方であり、それへの回復を意味する言葉です。こういった意味で「地を継ぐ」というのは、奴隷だった人々が、捕囚の群れが、抑圧されてきた人々がその基本的な権利を取り戻し、回復することだと思います。

このように聖書の教えを通してオバマ氏をアメリカが選んだ背後を理解してみました。私はこのような教えを持っている宗教が世の中にあることで大変ホッとしております。そして、このような思いやりのある神様を信じて良かったと、幸せだと思っております。

そして、本文11節で地を継ぐ者との関連で重要な概念が「貧しい人」です。この貧しい人という言葉は聖書全体を通して100回ほど出ていますが、旧約では詩篇が一番多く69回のうち30回でています。そして、新約では31回のうち21回が福音書です。新約で一番多い分量のパウロ書簡には5回、パウロはあまり貧しい人に興味を持たなかったようです。本文11節の地の継ぐ者と貧しい人との関連のことがマタイによる福音書の5章の3節と5節に記されています。

3節・心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

5 節・柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

3 節では心の貧しい人々が天の国を所有することとセットになっています。皆さんもご存じのように心の貧しい人々とはルカによる福音書 6 章の 20 節ではただの貧しい人々です。聖書全体から見ますと貧しい人の方が殆ど使われています。それから天の国は神の国になっています。このようなところからこの貧しい人々こそが地を継ぐ者として考えられます。

どの時代、どの場所においてもこの貧しさは怠けていたからではなく、奪われたからの方が多いです。貧しさはただ経済的な面だけではありません。人種、宗教、性などのあらゆる場で被抑圧的な状態に置かれている人です。

そして、5 節では柔和な人々が地を継ぐこととセットになっています。柔和な人とはこの他に、マタイ 21 章 5 節にも記されていますが、そこでは子ろばに乗っている柔和な方、イエスが新しい時代の統治者として描かれています。この柔和な人と貧しい人や地を継ぐ者との関連は非常に深いということです。木田先生は単に柔和ではなく、もっとも重い責任を負わされ、もっとも忍耐強くその責任を担っていく人物だという意味だと。使命のうえに苦難を負い、苦難に耐える人間であったと言っておられます。

聖書にはこのような貧しい人と柔和な人は単数でなく、複数で記されています。当然のことで世の中の貧しい人は複数です。地を継ぐ者も当然複数だと思います。こういった意味でオバマのキャッチフレーズがブッシュ政権の自分、そしてアメリカだけの「I」ではなく、「We」であることにはとても好感を持ちます。どんな形であれ一度はひもじい思いを経験した人は現実を良く知っています。オバマ氏はこの思いをいっぱい持っている貧しい人であります。その上さらに柔和な人になって欲しいわけです。

最後に 11 節の貧しい人が地を継ぐという言葉の後に出る言葉も素敵です。

豊かな平和に自らをゆだねるであろう。

平和であるが豊かな平和です。貧しくても得られる平和。何にも持たなくても今の時代を生きて良かったと感じる平和は素敵ではありませんか。(第 179 号・2009. 1. 25. 証詞より)